議事概要

第 22 回 APBON ウェブセミナー

1. 日時: 2024 年 10 月 11 日（金）15:00-17:00 日本時間

2. 会場及び参加者
場所: Webex ミーティングルーム（オンライン）
参加者：18 名
司会者：村岡 裕由 氏 (岐阜大学)

3. プログラム
<u>プレゼンテーション 1:</u>
“Nature Futures Framework: a flexible tool to support the development of scenarios and models of desirable futures”
[Prof. Dr. Shizuka Hashimoto]

本プレゼンテーションでは、IPBES の専門家グループが新たに開発した「Nature Futures Framework（NFF）」の概要と背景について橋本氏より説明が行われた。このフレームワークは、SSP や RCP といった既存のシナリオが自然に関する多様な政策や管理の選択肢を十分に反映できていないという課題に対応するために様々な関係者の協力により開発され、2022 年にボンで開催された IPBES9 にて正式に受け入れられた。このフレームワークには「自然のための自然」（人間とは無関係に自然そのものが存在する権利を持つことを表す自然の本質的価値）、「社会のための自然」（生態系サービスなど、人間社会にメリットをもたらす自然の有益的な価値）、「文化としての自然/自然との一体」（人々が自然から分離されていないことを意味し、自然と人間の関係性を表す価値）の 3 つの主要な価値が提示されている。

橋本氏は、人々がシナリオやナラティブを作成するにあたって NFF を活用できるよう、その方法論的なガイドラインを IPBES のタスクフォースが近年作成中であると紹介し、日本語版のガイドも近日中に公開予定であると述べた。また、タスクフォースにより作成されたコンセプトレベルでのフレームワークのナラティブとモデルの図も紹介された。さらに IPBES は、将来の IPBES 評価において科学コミュニティに役立ててもらうことを目的に、現在、コミュニティ間の対話を促進し、既存のシナリオやモデルにおける知識的なギャップを収集していることにも言及した。

Q&A:

Q.　この新しい概念は、IPBES の評価や今後の昆明・モントリオール生物多様性枠組みの実施にどのような影響を与える可能性があるか。

A.　非常に重要な質問である。Nature Futures Framework（NFF）は、IPBES の将来評価のツールとして認められており、IPBES の評価を行う科学コミュニティに対して、既存のシナリオだけでなく NFF に基づいて作成されたシナリオも参照するよう奨励している。私の理解では、多くの既存のシナリオは、異なる開発の経路が自然および人々への自然の貢献にどのように影響を与えるかといった、未来への影響と不確実性の分析に焦点を当てている。しかし、これは単に影響に焦点を当てたものに過ぎない。NFF は、望ましい未来をまず定義しようとするとき、より目標志向もしくは未来から逆算する方法を取っており、さまざまな価値の視点に基づいて、望ましい方向に導くことができる未来や社会はどのようなものかを理解しようとするアプローチである。これが NFF に基づくシナリオと、SSP や RCP などの既存のシナリオとの大きな違いである。どちらも今後の IPBES 評価において有用な情報となるだろう。今年、私たちはモニタリング評価を開始し、近いうちに空間計画の評価も開始する予定である。来年には 2 回目のグローバル評価を開始する予定であり、空間計画の評価とグローバル評価では、意思決定を支援するための未来シナリオの役割に特に注目している。その時には多くの新しい NFF ベースのシナリオが評価に反映されると考えている。

次に、NFF が昆明・モントリオール生物多様性枠組みの達成にどのように貢献できるかという 2 つ目の質問についてだが、どれだけの人が理解しているかはわからないが、枠組みには明確に言及されている。目標の 1 つであるターゲット 14 は、生物多様性をあらゆるレベルの意思決定に統合すると述べられており、生物多様性だけでなく多様な価値を政策へ完全に統合することを指しているが、生物多様性の様々な価値をどのように理解するかに依存している。IPBES の価値評価によると、現代社会は自然の有益的価値に過度に依存していると言われている。私たちは自然の生態系サービスの経済的な評価によく注目するが、他の種類の価値の重要性をあまり理解していない。そのため、自然を評価する方法を変え、人間社会への有益的価値以外の様々な価値を認識し、それらを将来の意思決定に組み込むべきであると提案している。直接的な回答にはなっていないかと思うが、昆明・モントリオール生物多様性枠組みとの関連性を強調すればこのような回答となる。

コメント：

・　アムステルダム大学では、30by30 目標に基づいて欧州全体の保護地域計画を支援するために NFF を用いており、これにより生物多様性保全、文化、観光収益の 3 つのシナリオとモデルを欧州のコミュニティへ提示している。[Dr. Trisurat]

→　30by30 目標について言及されたが、NFF は政策介入について議論する際に、どの価値が優先されているかを理解する上でも役立つと考えている。30by30 について議論すると、一部の人は保護地域を拡大すべきだと主張するが、これは自然の本質的価値を優先していると感じる。また、OECM（保護地域以外で生物多様性保全に資する地域）といった地域ベースの保全政策の効果的な活用を支持する人もおり、私自身は OECM は有益的価値と、人と自然の関係性的な価値を混合したものであると思っている。OECM は、人間の利用を許しつつも土地や海洋を持

続可能な形で管理できるようにするものであるので、NFF はシナリオを作成するだけでなく、既存の政策や介入を異なる視点から理解するのにも役立つ。特に政策においてどの価値観が優先されているのか、暗黙のうちに含まれている前提の価値観を理解する助けとなる。[橋本氏]

プレゼンテーション 2:

“Can new cities help build nature-positive futures? A case study of Jakarta Metropolitan Area”

[Dr. Perrine Hamel]

Hamel 氏は、東南アジアの都市地域における自然ベースの解決策に関する研究を紹介し、急速な都市成長が都市の内部だけでなく都市外の農地や森林地帯にも影響を与えていることを指摘した。

プレゼンテーションでは 2 つのプロジェクトが事例として紹介された。1 つ目はインドネシアのジャカルタの新興都市を挙げており、ここでは民間のデベロッパーが持続可能な都市開発を推進している。政策資料とマスタープランを Nature Futures Framework（NFF）を使って分析した結果、「社会のための自然」および「自然のための自然」という価値がこれらの都市では支配的であること分かった。そして、異なる自然の価値を統合するにあたりトレードオフの関係は必要なく、追加費用をかけずにこれらの価値を強化できることが示された。また、東南アジアの都市における深刻な不平等問題に焦点を当て、これらの都市の未来においては公平性が重要であることも強調された。

2 つ目のプロジェクトとしてタイのバンコクにおける事例が紹介され、Baan Mankong Social Housing Program のもとで、脆弱なコミュニティが都市の自然をどのように評価しているかを探った調査が説明された。調査結果では、これらのコミュニティでは小さな庭や高度なスピリチュアル精神が表れたシロアリの塚などを通して、多様な形で都市の自然が見られることがわかった。また、現地でのインタビューや調査の結果、自然ベースの解決策に対する利害関係者の好みがそれぞれ異なることも示された。

Hamel 氏は、NFF が都市における自然の複雑な価値を理解するための有用なツールであると結論づける一方で、現在進行中の研究課題や、東南アジアにおける NFF のフレームワークを使用するためのキャパシティビルディングと教育の必要性についても言及した。

Q&A :

Q. 自然の要素として水、土壌、生物多様性といった項目を考慮していたように思うが、実際どのような自然の側面を考慮しているか。また、都市の人々が関心を持つ生物多様性の側面にはどのようなものがあるか。

A. 私たちが考慮している都市の自然の種類はとても幅広い。まず、内容分析ではバイオームやグリーンインフラなど環境に関する要素はすべて見ていった。それは湿地や森林(ある場所では森林保護区も含まれる)などの自然要素から、緑の屋根、緑の壁、バイオリテンションシステムといった人工的な構造物にまでいたる。ゆえにここでの自然の概念は土壌、空気、水、動植物が含まれる非常に幅広い

ものである。

2 つ目の質問については、シンガポールをはじめ東南アジアの地域で研究されている生物多様性と都市生物の多様性の指標に関連する研究が良い例だと思う。というのも、生物多様性は多面的であり、注目する種によっても異なるため、単純な景観指標が都市生物多様性の指標として十分でないことがあるからである。単に生息地の大きさや面積を指標とすると、例えば特定の種の連結性や資源利用が考慮されないため限界があり、それゆえ生物学者ではないものの都市に自然を取り入れるために自然の有益的かつ本質的価値の両方を考慮する私のような立場の人たちが使用できる指標にはかなり大きなギャップがあるということである。これらの指標が発展していくことで、生物多様性の価値が考慮されたより良い都市計画が可能になると思われる。

Q. 発表者の都市においては外来種をどのように扱っているか。

A. 私自身は外来種に関する研究はしていないため、この質問には Trisurat 氏や橋本氏のほうが専門的に答えることができるだろう。私が述べられることとしては、都市における「自然のための自然」の観点からは、外来種への検討はもちろん非常に重要な項目であるということである。自然の有益的な価値の観点から見れば、外来種は人々に利益をもたらすこともあるため、必ずしも問題にはならないが、生態系や「自然のための自然」の価値から見ると考慮すべき大切な事項となる。シンガポールの生物多様性指数といった多くの都市自然指数では、外来種が 1 つの指標として考慮されているが(IUCN の指標でも同様だと思うが)、実用的な目的から簡素化されることも多い。

コメント:

- Hamel 氏の回答が適切であると思う。実際、関与する利害関係者によって異なる場合がある。外来種が自然や人々へどのような影響をもたらすかを認識していない人々もいるので、ステークホルダーの選定が重要である。外来種がそれぞれの価値観とどのように関連しているかの基本的な説明は Hamel 氏が説明された通りである。[橋本氏]
- タイの事例に関しては、自然環境への外来種の侵入について懸念されると思う。都市部では外来種として認識されているが、必ずしも侵略的というわけではない。しかし、最近では、大企業が繁殖のためにガーナから魚を持ち込んだことにより、湾岸・沿岸地域の在来種に大きな問題を引き起こしている事例がある。[Trisurat 氏]

Q. (NFF をどのように地域の人々とのコミュニケーションに使用したかがわからなかったため) NFF の概念自体は未来のシナリオを理解するにあたって良いと思うが、地域の人々の活動の評価にはどのように適用できるだろうか。

A. ジャカルタの事例では、例えば水質汚染に関する要素があれば、それを「自然のための自然」として分類している。水を大切にすることは環境を汚染しないということであるのでこのカテゴリーに含めているが、部分的には「社会のための自然」とも捉えられるかもしれない。そのため、主観的な解釈が入り込む余地を減らすためにカテゴリーごとに体系的に明確な説明を設けている。同様に、インタビュー内容

の分析でもすべての発言からそれぞれの価値観を表わす要素を抽出し、”この要素は「自然のための自然」の価値を表している”と人々が捉えられるようにしている。例えば、「そこに昔から木があったのでなくならないように大切にしている」と言えば、それは「自然のための自然」の価値に該当する、といったような説明である。

Q. それぞれのエコシステムサービスやエコシステムの機能は、シンプルに NFF に関連しているということだろうか。

A. エコシステムサービスに関して言えば、それらは定義上「社会のための自然」により近い。人々が認識しやすいものが多いので私が示した最後のツリーチャートでもそのように強調されているが、必ずしもエコシステムサービスだけでなく、最適なフレームワークを使用するために自然の人間社会の貢献の一部として他の価値の要素も含まれている。